



クリーン度 10000 クラスの紹介する澤瀬GM(右)と倉社長

シリコンゴム製品の品質に自信 クリーンルーム一貫生産で差別化

企業紹介
おしゃまします

リケン・テクノロジー(タイランド)

「シリコンゴム」「ナイロン」でネット検索すると最上位にヒットするリケン・テクノロジー(タイランド)。専門商社、内村(大阪市西区)と関西理研ゴム(大阪市東成区)がそれぞれ51%、49%を出資し2012年10月、アマタ

ナコン工業団地(チョンブリ県)に立ち上げた合弁企業だ。タイでの事業であるが、売り上げの8割を占めるのが工業用クロメットやクッションなど産業用機械部品の製造販売。残りが魔法瓶のパッキンなど食

品用・医療用部品の製造販売となる。

リケン・テクノロジー(タイランド)の澤瀬孝司(右)と内村マナブ(左)社長。同社は「当社ではシリコンゴム製品をクリーンルームで一貫生産する。この点

が他社との違い」と力をこめる。樹脂製品メーカーはクリーンルームを保有しているケースが少なくないが、ゴム製品を扱う企業では極めて稀という。ただクリーンルーム

での製造はどうしてもコスト高を招き、価格競争力でローカル企業に遅れをとる。しかしクレームの原因ともなる白いシリコンへの黒点や異物の混入を完全に回避できるなど、品質には絶対の自信を示す。そのため品質に厳しい日系企業に完全対応できる点も同社が取引先に選ばれる理由のひとつとなっている。

金型試作の早さに自信

リケンテクノロジー(タイランド)はプレス機16台を所有。うちクリーンルーム内に4台が設置されている。さらに、オンエイジングテスト、ヒートエ

イジングテストも保有。大規模なゴム製品工場ならともかく、中小企業での最新の検査設備の導入例は非常に珍しいという。

顧客からの信頼度をさらに高めているもうひとつの理由が、金型試作の早さだ。澤瀬GMは以前、金型業界にいたことから分野に精通しており、そのため日系金型メーカーと強い関係を築いている。日本で金型メーカーに依頼する場合、通常試作だけで最低2週間

かかるとは異なる。しかしリケン・テクノロジー(タイランド)では8日間で日本に納品、複雑なものでも10日間を目標としている。また試作を嫌う金型メーカーは多く「お断り見積もり」をされることすらあるというが、同社ではこれまで金型関連のトラブルは皆無。微調整も短時間でいい、その後も技術面での支援を継続していく。「これは他社にマネできない部分」と澤瀬GMは語気を強める。

物流面でのメリット考慮

内村の100%子会社として2010年2月に登記した内村タイランドの倉庫社長は、関西理研ゴムの製品は日本国内で価格競争が激化したことからインフラが整っており内村も進出しているタイへの進出を決めたと話す。タイは大手取引先も進出しているほか、ASEAN市場の拠点となる

わが社の製品/サービス



「工業用防振ゴム・グロメット・キャップ・Oリング等さまざまな型物を製造しています。少量多品種の部品から自動車向け大ロットまで、幅広く対応いたします。NR、SBR、CR、EPDM、NBR、H-HNBR等すべてのゴム材料を取り扱っておりますので、ゴム部品でお困りのことがございましたらお気軽にお問合せ下さい」



「清浄度 10000 クラスのクリーンルーム内で、食品用・医療用のシリコンゴム製品を製造しています。試作は最短8日！素早い対応と専門技術にてお客様のご要望にお応えいたします。【材料の裁断】—【成型】—【仕上げ】—【洗浄】—【検品】—【梱包】の全工程をクリーンルーム内で一貫生産しております。工場見学も随時受付しておりますので、ぜひご連絡下さい」



リケン・テクノロジー(タイランド)
チョンブリ県アマタナコン工業団地・フェーズ9
Tel. 038-212-354 Fax 038-212-356
Web http://rikentechno.com/
日本人直通 092-250-0166

【第4面から続く】

物流面でのメリットも考慮した。関西理研ゴムの海外工場はタイが初。製品の売先であるが日本が8割、タイ国内が1割、米国・英国・ブラジル・インドネシア・イタリア・インドなど第3国が1割となる。今後の展開であるが、

既存顧客との関係を深めるとともに、海外の案件獲得にも力を入れる。現在、米国で積極的な営業活動を行っているが、これを他国でも展開していく。予算達成率はこれまで7割前後だったが、今年は100%超えを目指す。食品関係の新規案件が伸びていることを好材料に、生産効

率引き上げ、不良品率引き下げ、外注費用や電話システムなど固定コスト削減などで業績を一気に好転させる。

3言語の作業標準書導入

タイ人スタッフは現在14人で、会社創立時から残っているのは4人。「タイ人とのコミュニ

ケーションには苦労しており、良かれと考えておいた計画がありがた迷惑に受け止められることもある(澤瀬GM)という。たとえばチームワークを高めるためチーム制のボーリング大会を企画し、午後3時に工場を閉め午後8時まで楽しんでからおうとしたところ、一部の従業員から「残

業代はでるのか」と聞かれたという。余剰人員が必要となり人件費がかさむため無断欠勤には厳しく対処するなど、従業員教育は苦勞の連続だ。以心伝心、背中をみて覚えろ、などの日本の感覚は持ち込まないようになっている。また、定着率が低いことから作業は極力標準化。わかりやすい作業標準書をタイ語、日本語、英語の3言語併記で作成した。英語を入れたのは日本語からタイ語に訳した時のニュアンスの違いを緩和するためだ。なお、この3言語の作業標準書を知った数社が現在自社工場に導入しているとのことだ。

(倉林義仁記者)

【第5面に続く】